

科学とヨーロッパのキリスト教的世界像(二)

——十六・十七世紀の学術研究と新しいコスモスの創造——

舟越 清

三 聖書からアルファへ

いつ、いかなるところでも、新しい思想が古い思想を克服して新しい秩序体制を建設しようとする時期には、新旧ふたつの思想の相克を基底にした一種の混乱現象が、内的外的世界に生じるものである。中世末期から近代へ転換する時期のヨーロッパにおいても、数々の新思想が出現し、旧来の思想と激しくぶつかり合っている。新旧両思想のはざまに置かれた社会に変換期に特有な一般的な混乱現象が、広範囲の領域にわたって生起している。

ブトレマイオスの天動説が支配的な時代にコペルニクスが地動説を説き、その正統性をコペルニクスに続く人々が主張して、異端審問にかけられ、その成果を公表禁止にされるかと思えば、ローマ教会を中心とした伝統的な宗教界に、信仰によってのみ人は救済されると説くルターを中心にした新しい改革の波が、激しい論戦をいどみ、その勢力を拡げて、ローマ教会と熾烈な争いを行なっていた。経済的に実力を蓄えた諸侯は、政治的にも自己の権益を守り、拡大しようとして、この争いに加わり、かえって、国力を疲弊させた。あるいは、地球を球体として信じない時代に冒険心に富む船乗りが、果敢に大西洋を横断し、更に、太平洋を乗り越えて、再び出発地に帰還して、世界一周をなし遂げて、地球が球形をしていることを実証し、あわせて、ヨーロッパの裏側にも諸民族が生活していて、宗教や生活の違いはあっても、ヨーロッパと同じように、立派な文化を形成していることを報告して、中世末期のヨーロッパ人に世界観の変更を迫った。十五世

紀から十六世紀のヨーロッパは、中世末期から近代への過渡期に対極的なさまざまな思想の交差する中に自己を変身させようとしていた。

しかしながら、一見、無秩序に見えるこの変化にも、よく見ると、ひとつの共通したものが認められる。たとえば、コペルニクスの地動説に対するルターの批判は、聖書のどこにも記されていないことに批判する最大の理由が置かれており、ガリレオの学説が異端とされた決定的な理由は、「聖書に反する故」であった。つまり、聖書からはみ出した領域で真理が探求されたところに、コペルニクスやガリレオやケプラーの悲劇があった。これに対して、プロトレマイオスの天動説は聖書に記されている内容と適合しているために、その正当性が認められ、長期にわたって支持されることになった。真理は聖書とのかかわり合いの内での正当性が判断された。聖書、つまり、啓示に基づいているか否かによって世俗の實在の正当性を判断する例は、なにも真理の世界にのみ留まるものではなかった。魔女の實在に学問的な論拠を与えて体系化し、悪魔が人間にわいざつな行為を唆かし、手を結ぶ可能性を詳述したり、睡眠中の男性と情交すると言われる魔女の實在や魔女と性交する悪魔の實在に対する信仰を詳しく解き明かした中世人は、聖トマス・アクィナスなどのスコラ哲学者たちであった。魔女裁判にかけられた母親を弁護した天文学者、ヨハネス・ケプラーのような人でさえ、スコラ哲学者たちの見解に影響されて、魔女の實在の可能性を否定し得なかつたほどである。

中世末期から近代までの魔女や悪魔の實在に対する信仰は、その由来を当時のヨーロッパ人の精神的傾向に見いだされるのであって、一般に、当時のヨーロッパ人は、神の作用や聖書に還元され得ない不可解な出来事や自然現象が生じると、そこに悪魔や魔女の作用を見たのであった。当然のことながら、そのような悪

魔や悪霊たちの排除の論拠も、神の啓示に、つまり、聖書に求められた。たとえば、出エジプト記二十二章十八の「呪術を行なう女は生かしておいてはならない⁽¹⁾」という旧約聖書の章句に魔女信仰や魔女撲滅の論拠が見いだされた。異端者の排除にしても、その論拠はマルコの福音書、十六章十六「信じてバプテスマを受ける者は、救われます。しかし、信じない者は罪に定められています⁽²⁾」に、あるいは、申命記十三章のえせ預言者と邪神(偶像)崇拜へ誘惑する者に対する罪などに求められた⁽³⁾。中世末期から近代にあっては、このように、聖書のさまざまな章句に従って異端者や魔女や悪魔に永劫の罰が下されたのであった。

真理や認識についても同様であって、すべての真理や認識は、世俗的なものであれ、宗教的なものであれ、神の啓示と見なされ、その啓示は聖書に求められた。その神の啓示は、もっぱら、教会の司るものとされ、宗教界によって解釈され、スコラ哲学によって教義の中で統一的に体系化された。真理や認識は中世末期までにあつては、それを探求すれば、必然的に神の啓示に触れることになり、神と結び付けられた思考となつた。中世末期までにおいては知的な生産活動に携わつた人々の殆んどが聖職者であつた理由のひとつが、ここにあつた。聖書こそ中世末期までのヨーロッパ人にとって真理以外のなにもでもなかつた。

こう見るなら、中世末期までのヨーロッパ人は、神の啓示が記されているとされた聖書というレンズを通して宇宙を含めた現象世界を解釈し、その解釈に従つて自らの世界観を構築し、その世界観の中で生活していたのである。この意味で中世末期までのヨーロッパ人にとって聖書と現実とは緊密であつたと言える。

こうした中世的世界観の中にあつてコペルニクスやガリレオやケプラー等の科学者は、宇宙を含めた現象世界に生起する現象を、聖書というレンズと異なるレンズを通して探求し、その結果に基づいて、宇宙を含

めた現象世界に生起する諸現象に活きる法則性を探し求めた。ルネサンス以後、神学以外の諸科学研究者が探求しつづけた最重要なものひとつは、宇宙を含めた現象世界に生起する諸現象を探求する際に必要なレゾを、聖書や神学以外に探し求めたことであった。

四 十六・七世紀の学術研究者と新しき世界像の創造

十六世紀の末から十七世紀にかけて学術研究の分野であげたまざまな成果は、十八世紀末から十九世紀、二十世紀にかけての学術研究において目をみはるほどの成果をあげた場合に優るとも劣らぬものであった。たとえば、ネピアの対数表の発見(一六一四)、デカルトの解析幾何学の創造(一六三七)、ケプラーの天体軌道の計算とそれによる天体軌道に関する諸法則の発見(一六〇九—一九)、ガリレオ・ガリレイの落下の法則と振子の等時性の発見(一六〇九)や望遠鏡を使つての天体像の拡大、ウィリアム・ハーヴェイの血液循環の発見(一六一八)、オットー・フォン・ゲーリケの空気ポンプを使つての真空実験(一六三五—五四)、ロバート・ボイルの空気ポンプとガラス容器のレシーバの使用によるさまざまな実験成果とボイルの法則の発見(一六六二)、振子時計(一六五七)や光の波動説(一六九〇)などの発明発見をしたホイヘンスの多方面にわたる物理学上の業績、エドモンド・ハレーによる彗星軌道の周期の算出(一七〇五)、それにニュートンやライブニッツによる微分積分学の創造(一六六九、一六七二)、そして、ニュートンの万有引力の法則(一六六六)など、これら、十六世紀から十七世紀にかけての天才たちによって発見され、創造された学術上の幾多の業績は、十

九世紀から二十世紀にかけての学術研究上のめくるめく成果を生む土台になっているものが多い。

かくも輝かしい学術研究上の諸成果を十六世紀から十七世紀にかけての天才たちはあげたが、そのような成果をあげるべく、これら天才たちを駆り立てたものは、中世の神学的世界像から解き放たれて、それとは異なる新しい世界像を見いだしていたことにあるのであって、それはコペルニクスやガリレイからティコ・ブラーエやケプラーを経てニュートンによって最終的に確立された地動説に見られるように、宇宙を含めた現象世界の中にはなにか不変の諸法則があつて、それによって宇宙を含めた現象世界は統括されながら活動しているとする世界観にほかならない。

宇宙や現象世界を動かす不変の諸法則を見いだすのに、十六世紀から十七世紀にかけての天才たちは、中世とは全く異なる方法を用いた。地動説を確立させた諸法則の発見は、望遠鏡という器具を作つて、天体観測をし、その結果をもとに数学を使って数式で表現することによって成し遂げられた。ゲーリケは真空ポンプを使って空気に圧力のあるのを見いだしたし、ボイルは真空ポンプとガラス器を連動させて、ガラス器を真空にし、その中にいろいろなものを入れて観察し、その結果に基づいてさまざまな発見をした。数学の精度さと新たに創造された観測器械や実験器具の使用の発見こそ、近代の天才たちに宇宙を含めた現象世界を統括しながら動かす諸法則を見いださせたものにほかならない。宇宙を含めた現象世界を統括して動かす諸法則の発見が観測器械や実験器具の創造とそれを使用することによって成し遂げられるという認識こそ、近代の学術研究の発展の基盤であつた。

しかしながら、こうした認識それ自体が、当然のことながら、そのよつて立つ根拠を持たなかつた。中世

の神学的世界像の崩壊後、新しいコスモスは構築され得なかったからである。

新たに発明発見された諸法則にしても、宇宙を含めた現象世界で生成する諸現象を部分的に、しかも、恣意的に解明したにすぎず、諸法則を発見発明する主体さえ、コスモスの中で明確に位置づけられていなかった。この時代の大部分の学術研究者は、ニュートンに見られるように、神学とかかわり、宇宙を含めた現象世界を支配していると見られる諸法則に聖書に示された神の英知と力を見るのであった。この意味で十六世紀から十七世紀に活躍した天才たちは、自ら発見した宇宙を含めた現象世界に生きる諸法則に神の存在を位置づけつつ、新しい世界観を形成して行ったと言える。とりわけ、神の存在と宇宙を含めた現象世界に実在する諸法則の発見の可能性を人間に置きつつ、宇宙を含めた現象世界全般にわたる新しい世界像を構築するのに確固とした中心を探索し、その中心から神と宇宙を含めた現象世界全般を吟味しつつ、新しい世界像形成へ第一歩を歩んで、後世の世界観形成に大きな影響を与えた人がいた。それはフランスの数学者であり、科学者、哲学者であったルネ・デカルト(一五九六—一六五〇)であり、ドイツの数学者であり、哲学者、歴史家であった、ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライブニッツ(一六四六—一七一六)であった。

五 デカルトのコスモス形成

デカルトはガリレオ・ガリレイの研究姿勢に対して、ガリレイはひとつ体系にしたがって実験をしていないし、自然の第一原因を考えることなく、個々の現象の原因を探索しているにすぎない、ガリレイの研究成

果には根本が欠けていると批判しているが、このデカルトのガリレイ批判には、デカルトの世界像探求の志向性が赤裸々に示されている。デカルトはガリレイの研究に欠けているとした根本を求めて、思索したからである。

デカルトは、ガリレイに欠けているとした自然の第一原因を求めて、深い思索の結果、新しい世界像形成にあたって、その中心を懐疑を通して探求した結果、人間自体に見いだし、その人間存在の本質として人口に膾炙されている言葉、「われ思う、故にわれあり」(*cogito, ergo sum, je pense, donc je suis*)に、つまり、人間の思惟に見いだし、その思惟を究極の確実性として新しいコスモス形成のアルキメデスの支点にすえた。

デカルトは究極の確実性として設定した思惟そのものを更に吟味をし、そこにさまざまな数多くの異なる観念があるのを発見し、それらの諸観念が外界の一切を認識する原点になっているのを知った。そこで更に人間のこの精神世界を構成している諸観念の出所を探求したところ、それらの諸観念がいずれもそれらの対象が表象しようとするものを完全に現出しているのを知り、更に、それらの諸観念の由来を求めたところ、それらの諸観念のすべてが、「私が細心の注意を払えば払うほど、私のみからでてきたものであるなどとはますます思えなくなるもの」、つまり、「ある無限な、独立な、全知かつ全能な、そして私自身をも——も私のほかにないものが存在するとするなら——他のすべてのものを創造した実体」⁽⁵⁾以外から由来し得ないとして、その実体を神とし、その神を広い意味での天空を含めた現象世界の創造者そのものと規定した。思惟を通して見いだされた精神を構成する諸観念がそれらの諸観念の完全性をそなえた神から由来したと見な

されているが、これらの諸観念が神から人間にもたらされる根拠をデカルトは、神が人間を創造する際に、人間を神の似姿にかたどって作り、その時に神自らの観念をもこの似姿に植えたことに求めている。思惟を吟味した結果、人間が神を知り得、外界を正しく認識し、真理を発見し得る根拠が、人間創造の際に神自身が神自らの似姿をかたどって人間を作った神の行為に見いだされているのであって、この神の似姿は神と人間を結びすぎずなとなつて、デカルトによる新しいコスモス形成の礎となつた。

デカルトによって究極の確実性として把握された思惟は、今見てきたように、中世の神学とは異なつた意味で神学的に基礎づけられているが、思惟に対するこのような神学的な基礎づけは、デカルトの場合、神や精神以外の現象世界に対する把握と深く結びつけられてる。

デカルトは、人間精神に神の似姿を内在させることによつて、人間精神による現象世界に内在する真理探求に主体性と自主性を与えたが、その、自主性と主体性を与えられた人間精神による真理探求の対象としてあげられているものは、事物や事物の変容、あるいは、永遠の真理とされている。より具体的には、事物とは、実体持続、順序、数など、あらゆる種類の事物にかかわりを持つものであり、なかでも、事物の最高の部類としてあげられているものは、知性的事物、つまり、思惟的事物の類、精神、すなわち、思惟する実体に属する事物の類である。その他、認知、意欲、そして、認知や意欲にかかわるもろもろの様態のすべて、大きさ、長さ、幅、深さにおける延長、形、運動、位置、諸部分の可分性など、あるいは、精神と物体との密接な内的合一に由来するもの、飢えや渇きなどの欲求、感情、つまり、心の受動、怒りや喜びや悲しみや愛などの感情、更に、苦痛や快感、光や色、音、香り、味、熱、堅さ、その他、触覚的性質などのあらゆる

感覺があげられている⁽⁶⁾。要するに、デカルトは宇宙を含めた現象世界の一切を、人間精神による真理探求の対象にしたのである。これを真理探求の対象の側から見れば、現象世界そのものに真理が実在していることを前提にしているのであって、その前提なしに人間精神による真理探求の対象たり得ない。デカルトは現象世界に真理が置かれているのを見いだしていたにほかならない。

事実、デカルトの見る神や人間精神以外の現象世界は、天空を含めて同一物質から構成されていて、その物質に神が運動と静止を与えることによってさまざまな姿が現出する世界とされて、その由来は神の天空を含めた現象世界の創造に置かれている。

デカルトは、神は、天空を含めた現象世界を創造する時に、神の全能によって同一物質と運動と静止を同時に創造し、その物質に最初に運動と静止を与え、その後は天空を含めた現象世界に神自らが定めた諸法則にしたがって、天空を含めた現象世界を構成する物質が行動し、次第に今日見られるような世界が形成されたとしている。神の似姿を内在する人間に見える現象世界は、同一物質と運動と静止とそれらを統括する諸法則より成る世界であり、惑星を含む天空の全物質が太陽を中心にして不断に渦巻き状に回転する流体力学的な連続体としての宇宙像であった。動物や人間の肉体やその機能にしても、天地創造の時の同一物質の運動の特殊な形としての熱機関を中心にした自動機械として捉えられている。神と人間精神以外の現象世界の一切の形態は、このように、デカルトの場合、同一物質と運動とそれらを統括する諸法則より成る物質的な力学的世界像であったと言える。

このようにして形成された現象世界は、神が完全無欠で不変である限り、神の完全無欠で不変性を現出し

ているものとされ、そのような現象世界には不完全や誤謬などが実在することが許されていない。デカルトの見るコスモスでは、神の完全無欠性と現象世界に現出している姿が、現象世界を神の創造物とすることに、一致させられている。

デカルトにとって真理の所在は、永遠の存在であり、全知全能で、ありとあらゆる真と善の源泉で万物の創造者、無限の完成性としての神に置かれていたのであって、その神の無限の完成性が神の創造する天空を含めた現象世界に現出するものとして把握されることによって、現象世界が神の無限の完全性、つまり、真理の所在する場に転化されたのである。

こうした現象世界の中に実在するもののうち、人間のみは、その他の実在するものと異なつて、自己に神の似姿を内在させているために、その神の似姿を通して神の完全無欠を現出している現象世界の中に活きる神の完全無欠を、すなわち、真理を認識できるとされている。人間が内的世界に神の似姿を内在することが、神が創造する現象世界に実在する真理を認識するよりどころになつてゐる。それゆゑ、神の似姿を人間の内的世界に内在することが、人間を人間以外の現象世界に実在するものと区別する根拠にもなされている。神の似姿を通して人間の目に映じた現象世界は、どこを見ても、神の定めた諸法則が活動し、その諸法則にのつとつて同一物質が運動を行ないながら、神の完全無欠を現出している調和のとれた世界であつた。

デカルトは、一方に、人間精神に神の似姿を内在させることによつて人間精神に自主性と自立性を与え、現象世界に内在する真理を主体的に探求する可能性を確立し、他方では、現象世界を神の創造する創造物とすることに、よつて現象世界を神の完全性、つまり、真理の遍在する場に転化させた。そして、神の似姿を通

して人間精神によって現象世界に遍在する真理を探求する場として規定した。デカルトの世界像は、この、新たに規定された現象世界を、自ら確立した新種の人間精神を通して推論することによって形成されることになる。そして、このデカルトの世界像は、後に続く人々に受け継がれ、発展させられて、やがて、ヨーロッパに古典派を生むきっかけになった。

六 ライプニッツと彼の世界像

デカルトで見たように、ヨーロッパ中世の世界像が崩壊したのち、十六世紀、十七世紀において最も重要なテーマのひとつは、人間精神の自主性・自立性の確立と人間を含めた現象世界をどう把握するかという問題であった。この問題に、デカルト以後で大胆に、スケールの大きな解答を出して、十八世紀のドイツ文化に計り知れぬほどの果実をもたらす礎を築いたドイツ人が、ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツである。

ライプニッツは、ドイツ史の中でドイツに多大な不幸をもたらした三十年戦争終了の二年前の一六四六年に、今は東独領になっているライプツィヒに生まれた。ライプニッツの成長した時期は、三十年戦争後で、ドイツ史の中で最も精神的に貧しく、最も不幸な時代であったが、彼の父がライプツィヒ大学の道徳哲学教授であった関係で、ライプニッツは当時として望み得られる最高の教育を受けた。父の図書室に出入りして育ったせいも、八歳でラテン語を、十二歳でギリシャ語を学び始め、十五歳でライプツィヒ大学に学んでい

る。

ライプニッツは二十歳で法律学の学位を請求したが、ライプツィヒ大学は、彼の若さを理由に、これを拒否したが、その後、ニュルンベルクに近いアルトドルフ大学でその学位を得ている。アルトドルフ大学からは更に員外教授に招かれたが、他にいろいろ考えることがあって、ライプニッツはこの招請を辞退した。ライプニッツはより広い実践的な活動分野を天性の進路として選んでいたからである。一六六七年、ライプニッツはヨハン・クリステリアン・ボイネブルク男爵を介して、マインツ選帝侯、ヨージン・フィリップ・シエーンボルン公に仕えたが、一六七二年、対フランス政策のため、ボイネブルクと共にパリに出発した。当時のパリは、ルイ十四世の時代であつて、ヨーロッパの学問、文化、芸術の中心地であつただけでなく、政治、経済、外交など、ヨーロッパのすべての中心であつた。ライプニッツはこの花のパリに四年間滞在し、その間にパリに咲いた学問、哲学、文化など広い分野にわたつて当時の最新の知識を滔滔と吸収した。

ライプニッツは、パリに行く前に、すでに「具体的運動論」(Theoria motus conerctia)をロンドンの「ロイヤル・ソサエティ」に、「抽象的運動論」(Theoria motus abstracti)をパリの「アカデミー」に送つて、パリとロンドンの学会で知られていた。パスカルの計算機より高度の計算機を開発してロイアル・ソサエティの会員になつてもいた。

その関係でライプニッツはパリ滞在中に多くの著名な哲学者や諸分野の学者、科学者と交流している。パリでは当代きつてのフランスの哲学者兼神学者であるニコル・マルブランシェ(一六三八—一七一五)や代表的なジャンセニストであつたアントワーヌ・アルノー(一六一二—一六九四)やオランダの物理学者であるクリス

チアン・ホイヘンス（一六二九—一六九五）などに会い、一六七三年にロンドンに行った時にはその地で化学者であったロバート・ボイル（一六二七—一九一）やロイヤル・ソサエティの事務長であったオルデンブルクと交流している。一六七六年にはライプニッツはオランダのハーグでオランダの哲学者であるバルーフ・スピノザ（一六三二—一七七七）、を訪ねている。こうした汎ヨーロッパ的な環境の中でライプニッツは最新の知識や研究成果を身につけ、習得し、パリを去る頃にはすでにそれらを凌駕していた。微分積分学の発想もパリ滞在中であった。汎ヨーロッパの学术水準に達したライプニッツはドイツのハノーヴァーに帰国してからも、多方面に活躍しつつ、自らに固有の世界像を形成し、十八世紀のドイツ文化形成に多大の果実を実らす土壌を培い、ドイツにヨーロッパ文化の高い成果に触れる機会を与えた。

ライプニッツの活動は哲学、歴史、数学、更に、政治などと広範囲にわたっているが、それと同じように、彼の世界像も多岐にわたり、複雑でそう簡単に再構築することはできない。著作の多くは断片の形で残され、透徹した構想に基づいて書かれた作品は少ないというのが、実情である。『人間悟性新論』や『弁神論』は形の比較的整った作品ではあるが、代表作とは言えないといったぐあいである。今日でもライプニッツの決定的な全集はない。

が、それはそのまま、ライプニッツの世界像の汎ヨーロッパ的傾向を示すものにはかならない。ライプニッツの作品には当時の学術研究者の成果や交流の結果がいたるところにちりばめられているからである。例えば、宇宙を含めた現象世界全体を形成する要素としてライプニッツが設定した、最小不可分で究極の単位であるモナドは、イタリヤの哲学者であるジョルダノ・ブルーノ（一五四八—一六〇〇）やイギリスの医者で

あるフランシス・グリスン(一五九七—一六七七)やオランダの科学者、フランツ・ヴァン・ヘルモンツなどの研究成果に通じるものが認められる。現象世界の把握にしても、一方の中心に人間を置き、他方に人間以外の現象世界を置き、全体を神の創造物として捉えている点では変りはない。ただ、ライブニッツに固有な点は、ライブニッツが宇宙や人間を含めた現象世界全体の形成の主体にモナドを設定したことである。

ライブニッツのモナドは単一の実体で、部分がなく、広がりも形もなく、分割や分解があり得ず、自然消滅など考えられず、自発的に発生せず、部分の組み合わせによって作ることができないものであつて、発生も終焉も必ず一挙に行なわれ、神の創造によつて生じ、神による絶滅によつてのみ消滅するとされている。モナドの内部は他のモナドによつて変質や変化を受けることはあり得ず、モナドの中に入りする窓はなく、どんなモナドも必ず、なにか異なる性質を持つているが、分量において差異がなく、変化はモナドに内在する内的原理と具体的内容によつて行なわれるとされている。具体的内容とはモナドに内在する無限な多が内的原理に従つて変化したり、変化しなかつたりして、無限にさまざまな動きや関係を現わすことであつて、その無限にさまざまな動きや関係を現わすモナドの状態や流れが表象であり、変化や移行を引き起こす内的原理の働きが欲求とされている。現象世界を構成する最小不可分で究極の単位であるモナドは、自らの内に無限の多とそれを統括する内的原理を内包することによつて力と表象と欲求を外に現わす創造活動を持った生きた生命の最小不可分で究極の単位に変化させられている。

ライブニッツは、この、最小で不可分の究極の単位であるモナドが原初的な「一」、本源的な単一実体⁽⁷⁾である神自身から不断に放射されている閃光によつて生み出されるものと見、そのモナドを神によつて「創造

されたモノド」(geschaffene Monade)として把握している。したがって、「創造されたモノド」が外に現わす主体としての力と表象と欲求という三つの能力も、本源的な単一実体である神に内在するものに求められている。神には万物の源泉としての力と多様な観念を含む知性(知恵)と常に最善を選ぼうとする原理にしたがって変化や生産を引き起こす意志があつて、その意志と「創造されたモノド」の三つの能力が対応させられている。⁽⁶⁾「創造されたモノド」はこの対応関係で神とひとつの糸で結びつけられ、単なる漠然とした單位から感覺的單位へ、更に、より高次の意識や理性の單位へと、最高のモノドである神への方向に向かつて絶えず生成発展するものとして捉えられている。

さて、こうした、単一実体としての「創造されたモノド」の現実化であるが、それについてライプニッツは「創造されたモノド」自身に内在する欲求と力と表象の度合に應じてそれにふさわしい最善の形式を、根源としての単一実体である神の力と知性と意志によって現実化されると見ている。生きた生命としての「創造されたモノド」は神によって現象世界に「創造されたモノド」にとつて最善の形式をとつて具体的な姿を現わすことになる。ライプニッツの見る原初的な現象世界全体はこうした「創造されたモノド」の現実化された姿で満たされた世界であつた。

「創造されたモノド」の現実化された形で満たされた現象世界全体は、ライプニッツの場合、そのみに留まっていない。「創造されたモノド」の現実化された形の完成度の度合に應じて、完成度の高いモノドとそれよりも完成度の低いモノドの間に能動作用と受動作用があつて、神を仲介にして相互に作用し合つて依存関係が作られ、作用し合う依存関係の中で各「創造されたモノド」は他の「創造されたモノド」の表象を

互いに知り合い、こうして依存関係にあるモノド全体の表象を感知し、それを表象するとされている。「創造されたモノド」が宇宙を反映する永遠の生きた鏡とされるゆえんは、ここにある。⁽⁹⁾

ライプニッツは「創造されたモノド」の現実化とモノド相互の依存関係を、モノド自身の内部の内容の完成度の度合に依りて、調和のとれた現象世界が現出するように、神が観念の中で計算し考えたとして⁽¹⁰⁾いる。

調和のとれた現象世界の現出は、ライプニッツの場合、現象世界の現出以前に神によって神の観念の中で調和のとれた世界を現出すべくモノドが計算され思考され、その結果に基づいて構成された神の観念の中にある世界の設計図に従ってモノドの現実化やモノド同士の相互の依存関係が決められて現実化ないし現象化された結果にはかならない。神の計算し考えた宇宙構築の際の図面は、調和のとれた宇宙を現実化するために、モノドの現実化やモノド相互の依存関係のみを規定するだけではない。魂と有機体、自然の物理的世界と恩寵の倫理的的世界など、広く宇宙を含めた現象世界全般の間にもあるとされている。神の宇宙構築の図面は、調和のとれた世界を實現化するための総枠とすることができ⁽¹¹⁾る。

調和のとれた世界は、こうして神の宇宙構築の図面に従って現出するのだが、その世界を神の力と知恵と意志でふだんに持続させているところにライプニッツは神の限らない恩寵を認めている。ライプニッツの見る調和のとれた現象世界は神の恩寵の下に神とモノドと神の宇宙構築の図面によって現出されることになった。

ライプニッツはこうして現出した調和のとれた世界を構成するものうちで、表象や欲求や力のほかに記憶をとまらぬモノドを魂 (Soul) と呼び、魂の實在する有機体を、それ以外のものと区別している。ライ

プニッツは生物一般にこの魂となったモナドの存在を認め、生物形成の主体に置いている。⁽¹¹⁾魂となったモナドの現実化した生物は、神の創造製作した機械とかある種の自動体とされている。

ライプニッツは更に生物一般から人間を区別するものとして、魂となったモナドの発展した理性的魂をあげている。理性的魂は魂としてのモナドに理性や知識を身につけ、自己を知り神を知る力が加わったもので、精神とも呼ばれ、神そのものの似姿、自然の創造者そのものの似姿、小さな神とされ、この神の似姿の集合体に、それを統治する統治者として神を設定し、神と人間精神との共同体を神の国として把握している。⁽¹²⁾人間精神は神と共同体を構成することによって、その共同体の中で神の宇宙構築の図面を知り、それによって宇宙の体系を知り、神の宇宙構築の模倣もできるとされている。人間精神は、神と神の国という共同体を構成することによって現象世界における人間の優位性を位置づけたのである。

デカルトは自らの世界像を形成するにあたって出発点に人間の思惟を置き、その思惟のかなたに神の似姿の存在を知り、そこから神が存在することを示した。その神は同一物に運動と静止を与え、その変化に諸法則を置くことによって宇宙を含めた現象世界全体を創造したと把握された。現象世界の創造主としての神の實在なくしてデカルトの世界像は生まれ得なかつた。現象世界のひとつである人間も、神の似姿によって人間以外のものと区別され、神に最も近い存在とされたが、これとて、神の存在証明なくしてはあり得なかつた。その意味でデカルトの見る神はデカルトが思索して生まれた神であつて、啓示によってその存在を前提にしていた中世の神とは異なる神であつた。デカルトの見る神は近代において生まれた新種の神と言える。

ライプニッツの場合は、まず、現象世界の存在が前提にされ、その構成要素として独立した最小単位である単一実体、つまり、モナドが設定され、そのモナドは内に無限の多とそれを統括する内的原理を内包し、その多と内的原理によって無限にさまざまな変化や動きや関係を現わし、力と表象と欲求を持つものであった。力と欲求と表象を持つモナドは創造されたモナドと呼ばれ、この創造されたモナドに記憶をともしながらも魂とされた。魂が理性や知識を身につけ、必然の真理を認識し、自己を知り、神を知るところまで高められた時、この魂は理性的魂、つまり、精神とされた。さまざまなモナドは、独立した単位のまま、相互にさまざまな関係を結んで多彩で調和のとれた現象世界を構成するが、そのような現象世界の存在根拠をライプニッツはひとつの普遍的な必然的実体に見いだし、その実体(モナド)を神と呼んでいる。ライプニッツの見る神は現象世界に実在する一切を可能な限り包含する唯一の実体と言える。この神も、デカルト同様、現象世界の实在根拠を求めて、最後に到達した究極の実体であって、啓示に根拠を置く中世の神とは異なる創造主であった。が、現象世界の創造主としての神の存在なしではライプニッツの世界像は考えられなかった。その意味で、ライプニッツにしる、デカルトにしる、共に、その世界像は神の光輝く閃光の届く領域でその領域に生成する一切を新種の神と関連させて解釈し、位置づけ、永遠化した神話的世界像であったと言える。そして、その神話的世界像をもってデカルトとライプニッツは、二人が生きた時代の最大の課題であったテーマ、現象世界を統括する神は真に存在するののかという問題に解答を見いだし、また、与えたのである。この神話的世界像は十九世紀の中葉まで人々の精神を育み、豊かな巨大な創造文化を生んだが、十九世紀中葉以後に発展した科学と技術は、政治的経済的諸条件の下でより明確な地盤を求めて、この神話的世界像の根

本に踏み込み、それまでの文化の創造を支えてきた神話的世界像の土台を消滅させて、一切を俗化させた。⁽¹³⁾十九世紀末から二十世紀のドイツの作家たちは、この新たに到来したヨーロッパ精神の新事態をどのように受け止め、どう対処して、どのように克服しようとしたかを、自らの作品の中に残している。その足跡を、ニーチェの影響を基本に置きながら、十九世紀から二十世紀にかけての作家像を明らかにしながら、たどってみようと思うのである。

(ヨーロッパ文化特別研究助成による研究成果) (完)

〔注〕

- (1) 『聖書』、新改訳、日本聖書刊行会、一九六三、一二四ページ。
- (2) 同右、九五ページ。
- (3) 同右、三〇〇ページff。
- (4) Descartes, René: *Oeuvres*. Voll. II. *Corresp.* Mars 1638—Decembre 1639. Paris. 1898. S. 380 ff.
- (5) Ebenda: Voll. VII. *Meditationes de prima philosophia*. 1904. S. 43. (井上庄七・森啓訳『世界の名著』22、中央公論社一九六七、二六五ページ)
- (6) Ebenda: Voll. IX. *Les principes de la philosophie*. 1907. S. 45.
- (7) Leibniz, Gottfried Wilhelm: *Die philosophischen Schriften*. Berlin. 1885. Bd. VI. S. 614.
- (8) Ebenda: S. 615.
- (9) Ebenda: S. 616.
- (10) Ebenda: Bd. VI. S. 615 ff.

- (11) Ebdenda: Bd. VI. S. 621.
- (12) 裸のモナドからさまざまな段階を経て人間精神へ発展し、神と神の国を構成するという考えは、後に、上昇前進する人間精神の純化・完成という発展の思想や個性の生成発展の思想を生み、後世のドイツ文化形成に大きな影響を与えたこととなった。
- (13) これについては拙論『ニーチェと十九世紀のドイツの状況』ヨーロッパ文化研究第三集、一九八三、九九一—一四ページ。同Ⅱ、同第四集、一九八四、七九一—一〇一ページ参照。

[その他の参考文献]

- Bruno, Giordano: Reformation des Himmels. Leipzig. 1890.
- Bruno, Giordano: Dialoge vom Unendlichen, dem All und den Welten. Berlin. 1893.
- Bergmann, Ernst: Der Geist des XIX. Jahrhunderts. Breslau. 1922.
- Duboc, Julius: Hundert Jahre Zeitgeist in Deutschland. Leipzig. 1893.
- Scholz, Heinrich: Das Wesen des deutschen Geistes. Berlin. 1917.
- Fischer, Ludwig: "Cogito ergo sum." Wiesbaden. 1890.
- Jungmann, Karl: Die Weltentstehungslehre des Descartes. Bern. 1907.
- Meier, Matthias: Descartes und die Renaissance. Münster. 1914.
- Mahnke, Dietrich: Leibniz und Goethe. Die Harmonie ihrer Weltansichten. Erfurt. 1924.
- Görland, Albert: Der Gottesbegriff bei Leibniz. Gießen. 1907.
- Schmalenbach, Herman: Leibniz. München. 1921.